

# 大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

## Outcome report

|   |                                     |
|---|-------------------------------------|
| 計画名 Plan  | ロチェスター大学への訪問および研究指導                 |
| 氏名 Name   | 賀 瑞                                 |
| 研究科・専攻・学年<br>Graduate<br>school/Division/Year level | 経済学研究科 経済学専攻 博士後期課程二年               |
| 渡航国 Country   | アメリカ                                |
| 渡航日程<br>Travel schedule                             | 2025 年 10 月 17 日 ~ 2025 年 11 月 25 日 |

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

### 渡航計画の概要 Outline of the travel plan

申請者は 2025 年 10 月 17 日から 11 月 25 日まで米国ロチェスター大学経済学研究科を訪問した。

訪問の目的は、(1) フィールドトップジャーナルへの投稿を目指した論文「Dynamic Many-to-One Matching under Constraints」(以下「目標論文」)の改訂、(2) 研究と教育スキルの向上、(3) 研究ネットワークの構築である。

滞在中は William Thomson 教授と定期的なミーティングを通じて目標論文について構成、記述のわかりやすさや考え方などを議論した。また、同教授の大学院講義「Fair Allocation」を聴講し、Reading Group に参加して新規論文の報告と議論を行った。さらに、研究科の Theory Workshop において目標論文を発表し、関連分野の教員や博士課程学生と個別に意見交換を重ね、目標論文の改善点と将来の共同研究の可能性を議論した。

### 成果 Outcome

目標論文は投稿可能水準に概ね到達しつつあり、改善余地も具体的に把握できた。帰国後も Thomson 教授とメールで改訂を継続する計画である。目標論文に対する建設的なコメントに加えて、Thomson 教授から申請者の研究テーマの独自性に高い評価をいただき、**関連プロジェクトについても継続的に議論することになった。**

教育面では、講義運営、板書、質疑応答の進め方など、日本の経験とは異なる授業の仕方を学べた。とくに Reading Group での Thomson 教授と学生間のやり取りを通じて、**論点の提示や理解を促す説明技法の要点**を把握し、今後の教育活動に活かせる示唆を得た。研究面においては Theory Workshop および Reading Group での報告経験により、**英語による研究発表のスキルの向上**にも寄与したと考えられる。

研究ネットワークについて、ロチェスター大学経済学研究科の博士課程学生と共同

研究のプロジェクトを三つ立ち上げ、現在は Thomson 教授および研究科 Chair である Paulo Barelli 教授の助言を受けながら修正と分析作業を進めている。

これらの成果は滞在期間中にとどまらず、帰国後も継続する共同作業の枠組みを確立できた点に大きな意義があると考えられる。このように短期的なアウトプットに加え、中長期的な発展が見込まれる研究ネットワークの確立は、本渡航の重要な収穫の一つでもある。

上記の成果により、このたびのロチェスター大学への研究訪問による成果は期間内で終わったものだけではなく、今後も継続的な共同研究の基盤形成にも成功している。したがって、今回の渡航は当初の計画以上の進展が得られたと評価する。

## **今後の展望** Prospects for the future

今後は今回の渡航で得られた知見とネットワークを活かし、論文の執筆を計画的に進めていく予定である。

指導教員の関口格教授の指導のもと、目標論文の完成度をさらに高め、今年度内にフィールドトップジャーナルへ投稿するための準備を行う。

続いて、Thomson 教授と Barelli 教授との連絡を保ち、関連するプロジェクトを推進する。さらに、進行中および新規の国際共同研究プロジェクトについては定期的なオンラインミーティングによって推進させ、年度内に複数の初稿を整え、得られる成果を来年の国際学会で発表するように計画している。

申請者の研究は一貫して動学マッチング理論を核としている。今回の渡航で形成した国際的な共同研究体制とネットワークを活用し、進行中のプロジェクトの完成と後続研究の推進を図ることで、動学マッチング理論の発展という理論的意義に加え、保育園の途中入園や腎臓移植といった社会的課題への解決案に継続的に資することを目指す。

最後に、本渡航は(1)論文の改訂、(2)研究と教育スキルの向上、(3)研究ネットワークの構築の各側面において当初の計画を上回る成果をもたらしたと考えられる。

物価高の中で研究費が限られている状況において、京都大学大学院教育支援機構の海外渡航助成金がなければ実現し得なかったものであり、京都大学大学院教育支援機構のご支援に深く感謝申し上げます。



図 1 滞在中のオフィス



図 2 Reading Group の部屋



図 3 セミナー発表の様子



図 4 発表当日にもらったセミナー発表者用のオフィス